特集 わが山々は緑なりき

How Green Was My Mountain

未来につなげる浜松の森林づくり

浜松市域のほぼ7割を占める、10万3000ヘクタールもの森林。しかし、大半が人工林である浜松の森林は、今、林業の衰退によって、その半分が荒廃の危機に直面しています。どうして、そうなってしまったのでしょうか。

ある人は言います。「浜松の林業は伝統あるがゆえ、行政も林業関係者も新しい流れにシフトできていない」。また、「外材の流入や国内他産地の台頭などを言い訳に、自ら改革することを怠ったからだ」などという、一部誤解を含んだ厳しい意見も耳にします。

しかし、今まで林業によって管理された森林が水資源のかん養などにより、市民生活を根本から支えているのは紛れもない事実。そして、人工林が多い浜松の森林を守るためには、林業の活性化が欠かせません。今回の特集では、わたしたちの森林を本当の意味で「地域の宝」とし、それを未来につなげていくために、市民や行政が活動する現場をご覧いただきましょう。

まちと山を結ぶ人々の絆

人工林を切ることは悪いことではない

「木を切ることは悪いこと」。まちの子どもたちの多くは、そう思っているかもしれません。そんな子どもたちに対し「スギやヒノキなどの人工林を切ることは悪いことじゃないよ。切って使う循環が大切なんだよ」と訴え続けている集団があります。地域の林業者、製材業者、山林所有者、大工など、木にかかわる仕事をしている若者たちが集まる「TENKOMORI(テンコモリ)～天竜これからの森を考える会」です。

TENKOMORI会長の彦坂和行さんは語ります。「浜松市の北部、天竜川の流域には天竜美林とよばれる日本有数の人工林が広がっています。それは、先人が植え、育ててきた大切な資源。植えて育て、切って使ってまた植えるというサイクルが、今日まで天竜美林を守ってきました。そのことを子どもたちに伝えたくて、わたしたちは2007年にTENKOMORIを立ち上げたんです」。

TENKOMORIでは、市森林課の要請を受け、まちなかの小・中学校を中心に森林環境教育の「出前講座」を行っています。

この講座では、学校の体育館にスギやヒノキの苗木や、丸太、枝などを持ち込んで「山」を再現。さらに、チェーンソーなど山仕事の七つ道具もそろえ、子どもたちに五感で「山」を体験させるのです。「本当は山に来てもらうのが一番ですが、学校でヒノキのいい香りをかいだり、葉っぱに触れたりするだけでも、森林の大切さを知るきっかけになります」と彦坂さん。今後も積極的に出前講座に取り組もうと、意欲を燃やしています。

TENKOMORIが行った出前講座の1シーン

森林CSR事業で循環の仕組みつくる

このように「山」の若者たちが頑張る一方で、都市部でも浜松市の特徴の一つ「企業の力」を森林にと、新たな視点で活動している団体があります。浜松NPOネットワークセンター(中区佐鳴台三丁目)では、行政と連携し地元企業を巻き込んで独自の「森林での企業の社会貢献(森林CSR事業)」に取り組んでいます。代表の井ノ上美津恵さんは語ります。

「2006年に、市民協働を目的としたCSRヒアリング事業で企業およそ30社を訪問。その中の3割が、森林での社会貢献活動に興味があることを知りました。しかし、企業は、どこで何をしたらいいか分からない状態。反対に中山間地では森林のことをどんどんPRしたい。両方の思いが結びつかず宙に浮いたまま…。そこをつなぐ役割を果たしたのが、市と連携した『森林CSR事業』です。過去2年間は、企業、NPO団体、林業関係団体、行政などおよそ30団体と森林への理解を深め、浜松の森林には何が必要かを考えてきました」

井ノ上さんは続けます。「今年はいよいよ実践の年。森林資源と資金と志が循環することを目標に、間伐材を使った紙製品を企業に普及させることで、市内の間伐を進めていきます。森林の多面的機能を高めるために、今、さまざまな立場の人々が森林とのかかわりを表明しています」

こうした人たちの努力により、企業と森林が結ばれ、まちと山側が着実につながっている証が、森林に刻まれていくでしょう。

森林CSR事業のなかで実施した「ミニ森の健康診断」

緑あふれる自宅の庭を散策する渥美典久さん、愛子さん夫妻。川面から吹くさわやかな風が二人を包みます

都会にはない「豊かさ」を求めて

地域に溶け込み、新しい人生の開拓を

市の中心部から車でおよそ1時間半の天竜区春野町堀之内。緑の山あいを流れる気多川の清らかな水のほとりに、民宿を兼ねたストーンアートのアトリエ「晴れるや工房」があります。この工房を営む渥美典久さん、愛子さん夫妻は7年前の2002年に、中区西伊場町から三人の子どもたちと一緒に春野町へ引っ越してきました。

典久さんは元々、ある会社の二代目。かつては、まちなかのオフィスに通い、休日はテニスを楽しむ都会派のビジネスマンでした。そんな典久さんは、なぜまちでの生活を捨て、自然の中で暮らすようになったのでしょうか。

「きっかけは今から13年ほど前。わたしが46歳のころでした。ある友人に『引佐で一緒にカヌーづくりをしてみないか』と誘われ、新しいことは何でも挑戦したいと考えていたので、喜んで参加しました。そうしたら、カヌーづくりよりも自然に囲まれて仲間と交流することが楽しくなりましてね。その後、カヌー工房が天竜区横山町へ移転し、週末はほとんど横山町へ通うようになり、好きだったテニスとはだんだん縁遠くなっていきました」

横山町に通い始めて2、3年経ったある日のこと。典久さんはダム湖の水面に釣り糸を垂らし、物思いにふけっていました。すると、ふとした瞬間に「自分も年を取ったら、こんな自然の中で住みたいなぁ」という思いがわいてきたといいます。この思いは徐々に確信へと変わっていき、典久さんは「55歳になったら会社をやめよう」と決断、周囲にもそう宣言したのです。

「当然、家族全員が大反対(笑)。とくに、社長でもある父は辞めることに驚き、最初は怒りましたが、自分が辞めた後、スムーズに引き継ぎできるよう、着々と準備を進めました。そして、予定より少し早く52歳でリタイアし、この場所にログハウスの住処を建てたわけです。実際に住んでみての感想ですか？経済的には苦しくなりましたが、自然にいやされて心は豊かだと感じています」

そんな典久さんの思いを、妻の愛子さんはどう受け止めたのでしょうか。

「わたしも最初は猛烈に反対し、夫に『行くなら一人で行ってちょうだい！』と言いました(笑)。でも、当時、一番下の娘が喘息だったので、少しでも空気のいい場所へ引っ越した方がいいかもと思い、しぶしぶ付いて来たんです。そうしたら、わたしの大好きな野生の草花や山菜がいっぱい生えていて、『こっちの生活、意外といいじゃない！』となって(笑)。おまけに末娘の喘息も1年くらいでかなりよくなり、ひどい発作はなくなりました」。

人懐こい性格の愛子さんは、地元の人々ともすぐに仲よくなり、多彩な趣味を通して地域との交流を深めていきます。やがて、典久さん、愛子さん、長女の優さんの三人で、石にネコを描いた「石ネコ」を制作し、販売するようになると、これがテレビで紹介されて評判になりました。

典久さんは言います。「最近は定年退職後に田舎暮らしをしたい、という人が増えているようです。しかし、地域に溶け込もうという気持ちがなければ、地元の人たちに歓迎されないかもしれません。田舎暮らしを考えている人は、ぜひ新しい人生を開拓するという心構えを持ってください。そうすれば、有意義な人生が田舎で待っていると思います」。

アトリエで、家族3人がストーンアートを制作します

異業種から転職して、「通勤林業」に励む日々

さて、突然ですが皆さんは「通勤」というとどんなイメージを思い浮かべるでしょうか。普通は郊外からまちなかへと通うパターンですが、ここに「まちなかから山間部」に毎日通勤している人物がいます。北沢雄司さん、39歳。職業は「林業」です。

北沢さんは、1997年に天竜区船明の製材会社に入社。植林から製材まで一貫して行うこの会社で、北沢さんは足掛け13年、伐採や植林などの山仕事に携わってきました。自宅は南区高塚町。そこから会社までおよそ30キロの道のりを通い、さらに山奥へ入って木を切るという「通勤林業」に日々励んでいるのです。

「家族は妻と子ども二人。5年前、妻の実家近くに家を建てました。妻は子育てをしながら、まちなかで普通に働いています。ほかと違うのは、夫の仕事が〝木こり〟ということぐらいですね(笑)」。北沢さんは、そう言って屈託のない笑顔を見せます。

北沢さんは長野県長野市の出身。浜松市と同様、山林が身近な地域で育ちましたが、最初から林業志望だったわけではありません。以前は医療関係(臨床検査技師)というまったく畑違いの職業に就いていました。

「新潟の専門学校で資格を取り、1990年に浜松の総合病院に就職。その後、別の医療関係の会社で臨床検査に従事していましたが、会社の雇用形態の変化と結婚を機に転職を考えました。それで、次の就職先を探す時に思い出したのは、自分が学生時代、山岳部に所属し、山が大好きだったこと。『山でできる仕事というと、やっぱり木こりかな』。そう思い立ってハローワークへ行き、今の会社の募集を見つけたわけです」

山の仕事を素人が簡単にできるわけがないことは百も承知。しかし、北沢さんは持ち前の粘り強さで技術を身に付け、やがて会社の貴重な戦力に成長していったのです。

「山の仕事は肉体的にきつく、骨折などの大ケガも経験しました。それでも以前のような精神的ストレスはかなり少ないので、自分にとってはベターな状態。これからも頑張って、できれば70歳を過ぎても第一線で働きたいですね。ただし子どもたちが大きくなるまでは、当分『通勤林業』が続きます(笑)」。いつか家族みんなで山に住む日がくれば、北沢さんの心はもっと豊かになるかもしれません。

「昔に比べ精神的ストレスはかなり少ない」と語る北沢雄司さん

森林活性化への新たな道

森林認証の取得でエコ・ブランド創出へ

ここに、浜松の森林の将来を考える上で、とても重要なデータがあります。10万3000ヘクタールという広大な森林面積のうち、およそ8割に当たる8万1000ヘクタールが民有林。そして、民有林の76%は、スギ、ヒノキの人工林というデータです。

人工林は、植林、伐採、加工、流通、また植林というサイクルが崩れ、人の手が入らなくなると、やがて雑木が生い茂り、荒廃してしまいます。荒廃した森林は宝の山どころか、地域のお荷物になりかねません。「そうならないよう、わたしたち林業関係者は行政と協力して、さまざまな対策に取り組んでいるんです」。このように強調するのは、春野森林組合の岡本均組合長です。

「人工林荒廃の背景には、木材価格が過去30年間で大幅に低下したことがあります。この地域の木材価格が最も高かったのは1979年。当時に比べ、現在、スギもヒノキも、3分の1程度まで値下がりしてしまいました。安価な外材の流入や、木をふんだんに使う伝統的な木造家屋が減ったことなどが原因です。木材価格の低下によって森林所有者の収入は減り、規模の小さいところでは林業で生活することができなくなって、山林を放棄するケースが増えています。放棄された森林は間伐などの手が入らないため、急速に荒廃が進むのです」

森林は、単に林業の生産資源として価値があるだけではありません。貴重な水資源を蓄え、地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収し、さらに人々の心に安らぎを与えるなどの大切な役割を果たしています。そんな森林は、都市の市民生活と切っても切れない関係にあるといえます。

林業活性化の重要性を強調する岡本組合長

「人工林の多い浜松では、林業が衰退すれば森林も衰え、逆に林業が活性化すると森林も元気になります。そこでわたしたちは、低コスト林業の推進、新たな担い手の育成などの林業活性化策に取り組んできましたが、最近、新たな方向性が見えてきました。それは森林認証という制度を活用した『木材のエコ・ブランド』創出です」

木を切ってこそ森林の機能が保たれます

森林認証とは「持続可能な森林経営の基準」に沿って森林づくりが行われていることを第三者機関が評価・認証する制度。つまり、「この山で生産した木は環境に十分配慮している」というお墨付きを与えるものです。エコに対応しているという意味では、「ハイブリッドカーの森林版」と言ってもいいでしょう。

「今後、市内の多くの森林で認証を取得し、そこで生産された認証マーク付きの木材が市場に流通していく見通しです。もともと、この地域の木材は強さと色合いのよさで定評がありますが、エコのお墨付きによってブランドイメージがさらにアップすれば、一層の消費拡大につながるはず」と岡本さんは期待を寄せています。

林業活性化の第一歩は、まず地元の市民が地域の木材を積極的に消費すること。それがプラス方向に循環していけば、将来、浜松の森林は「光り輝く宝石箱」のようになっているかもしれません。

市場ニーズに対応して山をフルに活用

このように、さまざまな取り組みによって活性化への道が模索されている浜松の森林。ただ、木は何十年もかかって成長する「生き物」だけに、それを育てる人間は何世代にもわたって世話をし続ける必要があります。

「わが家は曾祖父の代から林業を営んでおり、わたしで四代目。祖父や父に学びつつ、自分なりの新しい手法も取り入れて、100年、200年という長期スパンで『理想の山づくり』に取り組んでいます」。そう語るのは、天竜区東藤平で50ヘクタールの中規模山林を育成する34歳の若手林業家、鈴木将之さんです。

鈴木さんの言う「理想の山づくり」とは、どのようなものなのか。実際に現場へ案内してもらいました。

山の入り口から、狭い林道を車で走ること数分。日当たりのよい傾斜地に、直径30センチほどの木がまっすぐに立ち並ぶ光景が見えてきました。広い間隔で並んだ木々のこずえからは明るい陽射しが落ち、根元に繁茂するシダの葉を白く浮かび上がらせます。

「ここは樹齢60年ほどのヒノキ林。根元にシダが生えているのは、ヒノキに適した赤土のやせ地である証拠です。わが家では、この場所を太めの木が循環できる林と位置付け、大切に育てています。直径1メートルほどの巨木に育つまで、後100年近くはかかり、自分は見ることができません。でも、これは林業家としてのロマンであり、理想の山づくりの一環なんです」

チェーンソーを使ってヒノキを切る鈴木将之さん。適切に木を間引くことも、理想の森林づくりには必要です

このほか鈴木家では、床柱などに使う絞り丸太という特殊な木を育てる山や、一般の人に自然体験の場を提供するための広葉樹の山、出荷用の花木・サカキ・山菜などを育てる山も保有しています。「一般的な建築用材だけではなく、多様なニーズに合わせた生産が行えるよう、山をフルに活用しているんです。山全体を一つの財産と考えれば、ビジネスチャンスは大きく広がってくると思いますよ」。

従来の林業は「木を育てること」だけに専念し、消費者や市場のニーズをあまり考えてこなかったのが実情。これに対し、鈴木さんたち若い世代は仲間同士で情報交換しながら、次に何を生産すべきか常に模索しています。「ぼくらが扱っている木はいいものだ、という自信はあります。今後も、新しい発想を持ちながら、代々の仕事を発展させ、次世代にも受け継いでいきたい」と鈴木さんは語っています。

「浜松の森林の ここが訊きたい」

浜松市農林水産部
村田和彦 部長

平成17年(2005年)の合併で、市域に広大な森林を有する全国でも新しい形の政令指定都市となった浜松市。森林行政の課題や今後の目標について、農林水産部の村田和彦部長に聞きました。

山とまちの一体感を醸成し、産業としての林業を強化

Q 森林問題に対する市民の関心は？

A 率直に言って、天竜区など山間部に住む市民と、まちなかの市民との間には「温度差」がありますね。多くの旧浜松市民にとって、森林問題は「知らない」「興味がない」というのが本音ではないでしょうか。ただ、合併前の浜松市の森林率はわずか9％しかなく、合併後、それが一気に68％へと上がったのですから、すぐに関心をもてないのも無理はありません。わたしたち行政の側も、正直なところ旧浜松市時代には、森林問題へのかかわりは、あまり深くありませんでした。しかし、合併後は農林水産部の中に森林課という専門の部署を置き、林業・木材関係者や市民グループと連携して、森林の価値を高めるための施策を積極的に展開しています。

今後は山とまちとの一体感を醸成していくことが重要であり、そのためにはまず、地域の歴史を知る必要があります。東西交流が盛んな現代に対し、昔は天竜川を軸とした南北交流が発達。それにより物流や文化の交流が盛んになりました。特に、私財を投げ打って北遠で植林活動を進めた金原明善翁の業績に、わたしたちはもっと学ぶべきだと思います。明善翁は「暴れ天竜」と呼ばれた天竜川の治水のため、「川を治めるには、まず山を治めよ」「山と川は国土経営の基本」と訴えました。つまり、川上の山を治めることが、川下の人々の暮らしを守ることにつながるわけで、これは現代の市民生活にも当てはまること。こうした先人の知恵を学びつつ、今ある森林資源をよりよい状態で次世代に引き継ぐことが、これからの課題です。

Q 林業活性化への取り組みは？

A 今回の特集で春野森林組合の岡本均組合長が指摘しているように、林業という産業の成立によって、結果的に森林が守られてきたのは事実です。木材価格が下落している現在、かつてのような勢いは望めないかもしれませんが、「やせても枯れても天竜美林」だと、わたしは思っています。実際、この地域の木材は他地域のものに比べ、木目が均一など品質が優れ、林業や木材にかかわる人たちの意識は非常に高い。また、後継者不足が問題になっている中で、「TENKOMORI」のメンバーなどモチベーションの高い若手の林業家、木材関係者が出てきています。市としては、まず、こうした産業としての林業の活性化を支援し、それを市民全体の財産となる森林づくりにつなげていく方針です。

また、林業を強化していく上では、森林整備の一番の担い手である森林組合の統合も重要なテーマです。現在、この地域には、天竜、春野、龍山、佐久間、水窪、引佐の6森林組合がありますが、これらの組織の力を結集し、より強固な財務基盤を築くことで、産業としてのインフラ整備を進めてほしいと思います。

このほか、市が実施している緊急経済対策の一環として、林業分野での雇用創出事業も行われています。これを短期的なものに終わらせず、継続的な雇用に発展させていくためにも、林業強化の必要性は高いと言えます。

Q 森林が環境に与える影響は？

A ご存じのように、森林は二酸化炭素を吸収するので、地球温暖化対策の上でも森林の機能は大きな注目を集めています。これに関連して、国は2008年から2012年の間に、3・8％の二酸化炭素を森林で吸収するという目標を打ち出しています。しかも、この目標は適度に間伐が行われた持続可能な森林で達成しなければならない、と決められています。これは林業にとってフォローの風と言えるでしょう。また、国際的な森林認証を運営する森林管理協議会(FSC)などによる認証も、地域材のブランド化のため、今年度から積極的に取得していきたいと考えています。

このほか、浜松市では今年から「バイオマスタウン構想」をスタートさせており、これによって森林に放置された間伐材の有効活用を図っていきます。バイオマスとは、動植物から生まれた再生可能な資源のことで、間伐材もその一つ。この構想では、地域で出た間伐材をチップやペレット(固形燃料)に加工し、ボイラー燃料などに利用していく計画です。

Q 森林行政の今後の展開は？

A やはり、まちなかに住む市民の森林への理解を促進していくのが重要なテーマです。理解が進めば木材の需要拡大にもつながり、それによって森林整備も自然に進んでいくでしょう。また、まちなかの市民が森林に足を運ぶことによって、山間部の市民との新たな交流が生まれ、先ほど申し上げた「山とまちとの一体感の醸成」にもつながると思います。

また、地域材の利用促進という観点で、今後、力を入れていきたいのは「天竜材の家／百年住居(すまい)る事業」です。この事業は、浜松市内の木材を使用した木造住宅に対して助成するというもの。助成額は上限40万円となっています。

こうしたまち側のニーズを掘り起こすには、山間部の人々の情報発信力をもっと強化するなど、課題は多いかもしれません。しかし、人、情報、資本といった、まちの高度な資源をうまく活用できれば、決して不可能ではないはずです。それは、まちと森林が共存する浜松市だからこそ可能なのだと、わたしは思っています。